

山雄 健次, 須山 正文, 真口 宏介 編  
画像所見のよみ方と鑑別診断 胆・膵

竹原靖明(相和会横浜総合健診センター)

「作品はどんなに高邁な思想や理論に基づくものであっても、それが対者に何らかの感動を与えるものでなければ名作とはいえない。名著とはその内容が充実していると同時に読者に納得と感動を与える『何か』がなければならない。その『何か』とは卓越した知識、経験のうえに、読者にその内容を理解させようとする誠意と情熱ではなからうか」。本書を手にし、類書にない新しい企画を目にしたとき、編・著者らの熱意が伝わり、老軀も疲労も忘れて、深更の空が白むまで読み耽った。そしてこれは正に「名著」であり、この領域を志す新進の若き臨床医への力強いメッセージとも思えた。

本書の最大の特徴は、画像と病理(マクロ)の対比を中心に、その疾患の把握と診断に関わる要点を「コラム」として簡潔にまとめ、それを適所に配して、種々の疑問や難解な事柄を氷解させている点にある。

その内容を具体的に列挙すると、

1) 250 例に及ぶ多数の貴重な症例が開陳されている。

1985 年に発足し 45 回を数える消化器画像診断研究会で熱い討論を経て練り上げられた症例が中心であり、一例一例に高い教育的価値がある。

2) 常に画像とマクロが並列で対比され、画像がなにを反映しているか、画像に描出された所見とマクロ所見との関係が明示されている。

画像はすべて病変をマクロ的に表現したものであり、マクロ所見と画像所見の関係を正確に把握することは形態診断の真髄であり、外科的治療にとってもきわめて重要な情報である。これだけ多数の症例を蒐集し対比させることは至難の業であり、四星霜にわたる編・著者たちの並々なら

ぬ労苦と熱意が感じられる。

3) 新しい診断論理が展開され、簡潔にして理論的に各種検査の個々の症例に対する有用性が示されている。

疾患単位に各所見をまとめ診断に導く従来の診断論理に捉われず、各所見単位に検査順位や診断経路を考える新しい方式が提示されている。この方式は論理的にはごく自然であり、簡明で理解しやすい。また、これは無駄を排除するクリニカルパスの理念にも通じるものである。

4) 各疾患の理解と診療に欠くことのできない要点を「コラム」として簡潔にまとめ、適所に配置している。

この「コラム」には疾患概念(分類やその変遷の経緯も含む)、臨床像、病理(マクロ所見)、診断(鑑別診断も含む)、治療、予後など疾患ごとに必要なもののみを取り上げ、きわめて簡潔かつ明快にまとめており、理解する上で大変有用である。

等々である。

本書を通読して改めて感じたことは、編・著者たちの画像診断に寄せる執念にも似た情熱と、次世代に伝承しようとする熱意が全編に漲っている点である。新進の若者を視野の中心に据え、多くの障害を克服して、信念を貫き、あるべき姿と歩むべき道を示した本書は、初心者にはもちろんベテランにも有為の「名作」であり、「労作」である。

願わくは、本書が起爆剤となり、本邦の消化器画像診断がさらに飛躍されることを期待して止まない。

B5・頁 336・定価 15,750 円(本体 15,000 円+税 5%)

2006 年 [ISBN4-260-00071-3] 医学書院刊